

# 花ちゃん、オー君、モンタ博士のかくかくドキドキ相立ててく3

国立市立国立第七小学校

平成27年6月29日 NO.37 (237)



花ちゃん 「あれあれ？だれだろう？」

モンタ博士「この二人はね、1年生のMさんとEさんEさんだよ。大きな葉っぱを見つけた！とって、モンタ博士に見せに来てくれたんだよ。うれしいね！  
これからも、おもしろいと思ったものをいろいろどんどん持っておいで！」

オー君 「それにしても大きな葉っぱですね。顔が隠れてしまいますね。ところで、この葉っぱは、何という植物の葉っぱですか。」

花ちゃん 「これは、プラタナスですね。」

モンタ博士「ピンポン。そのとおり、さすがは花ちゃん！では、和名は、何というかし知っているかな。」

花ちゃん 「スズカケノキですね。名前は、鈴のような実をぶら下げるからですね。」

モンタ博士「さすが花ちゃん。感心・感心だね。」

オー君 「なんですか。その和名とか・・・？」

モンタ博士「和名というのは、日本語の名前だよ。学名というのもあってね、植物や昆虫などにつける科学的で学術的な名前、ラテン語（イタリア語の古語で現在は使われていない）で書かれているんだ。」

オー君 「何だか難しそうですね・・・。」

モンタ博士「そんなことはないよ。それでは、今からモンタ博士の『ラテン語教室』だ。」

オー君 「え！『ラテン語教室』？」

モンタ博士「アロミリナ ディコトーマ (*Allomyrina dichotoma*) とは、カブトムシのことなんだ。それから、パピリオ クセウツス (*Papilio xuthus*) とは、アゲハチョウさ。プルヌス ムメ (*Prunus mume*) とは、ウメのことさ。」

オー君 「へえー。覚えられないです。モンタ博士。もっと簡単なものはないのですか。」

モンタ博士「あのね、チューリップもコスモスも本当は、ラテン語で学名なんだよ。」

花ちゃん 「サスビアもヒヤシンス、クロッカス、シクラメンもみんな学名ですね。」

オー君 「へえー。そうなんだ。ラテン語って身近なところにいっぱいあるんですね。」

モンタ博士「そうだよ。外国から来た植物などは、ラテン語のままの名前になっているものがいっぱいあるんだよ。クレマチス、カンナ、グラジオラス、ダリア、ベコニア、カトレア、プリムラ、ハイビスカス、シンピジューム、ハイドランジャー、アスチルベ、アイリス、リコリスなどなど、まだまだ他にもあるよ。」

オー君 「へえー。いっぱいあるんですね。よし！ぼくもこれからは、ラテン語をたくさん勉強します。」

## 学名について

その昔、ヨーロッパ列強の国々が、植民地を広げようと世界各地に進出していった頃。西洋の人びとは、次々に発見され持ち込まれる見たこともない様々なものに驚き目で見たいたことであろう。それは、動植物に対しても例外ではなかった。彼らはそれらをこぞって収集し、新種として名前を付けていった。博物学の時代の始まりである。ところが、何か新しい種類を見つけると、それぞれに名前を付けたが、様々な国では言語も違い、混乱が生じた。そこで、リンネという人が、国際的に共通な名前として二名法（『種』というものは、『属』と『種』の2つによって表す）という方法で、『学名』というものを考案したのである。カブトムシは、*Allomyrina* 属の *dichotoma* 種ということになる。コスモスとかサルビアなどは、正しくはそれぞれ *Cosmos bipinnatus*、*Salvia splendens* というのである。つまり、現在は、属名をそのまま植物の名前として用いているのだ。属名は、学者によって見解の相違があり、カブトムシは *Allomyrina* ではなく、*Trypoxylus* を用いる場合もあるようだ。なお、シクラメンの和名は、『ぶたのまんじゅう』というのであるが、やはりシクラメンはシクラメンでいいと思う。何故なら、『シクラメンのかほり』の歌詞が♪『真綿色した ぶんのまんじゅうほど 清々しいものはない♪』では…？